活力あるまちづくりを目指して

～市長と新任職員が熱血トーク「倉吉市政の行方」～

石田耕太郎市長が就任して2年が経ち、任期として、今年度は折り返し地点といえます。これまで、〝くらしよし〟ふるさとビジョン（第11次倉吉市総合計画）の策定をはじめ、多くの課題解決に取り組んできた石田市長が次に目指すものは？―市役所の新任職員と語り合いながら、平成24年度の施策方針を聞きました。

（聞き手：企画振興部総合政策課長　向井一博）

―最初に、今年度の施政・まちづくりの方針をお聞かせください。

石田市長　まず、総論的な話をすると、私は市長に就任する前からずっと、まちづくりのスローガンとして「倉吉を元気に　若者に夢を」を掲げてきました。これは、2年経った今でも変わっていません。

今、倉吉市が直面している大きな課題として、まず人口の減少があります。そして、少子高齢化が進んできているという面もあります。人口が減ることは、地域の活力の低下に直結するので非常に危惧しているところです。ですから、できるだけ多く雇用の場をつくって、若者に定住してもらう――そういうまちづくりが急務だと思っています。

今回、平成24年度の予算編成でも、雇用の場の確保に一番重点を置きました。定住施策は人口減少に悩む地方にとって、究極の施策だといえます。観光やコンベンションの振興にも力を入れていますが、これも結局は雇用を何とかしたいという思いからであり、ひいては定住施策につながります。外からどんどん人に入ってきてもらって、外の力も借りて地域の元気、地域の雇用を確保するのがねらいです。

反面、元気な部分ばかりに力を入れるだけではまちづくりは成り立ちません。高齢者や障がい者など、社会的弱者と呼ばれる人たちも安心して住むことができる地域づくりをしていかなければならないと考えています。今、日本だけでなく、世界中で大規模な災害が発生しています。そのような中で防災をはじめ、市民の安心安全を守るような施策をきちんとやっていくことも必要だと思っ

婚活イベントなどで若者定住を積極的に進めたい。

垣原（かきはら） 将志（まさし） 主事
企画振興部総合政策課

柔軟な姿勢で市民の皆さんの意見を生かしたい。

金光（かねみつ） 智志（さとし） 主事
総務部総務課

市民の皆さんが、倉吉への愛着と誇りを肌で感じ、頭で認識できるまちづくりを目指します。

ています。

市の行政は総合行政であり、どこか一部分だけをやればいいということではなくて、全体的にしっかりと配慮しなければなりません。だから、新任職員の皆さんもさまざまな部署に配置されるわけです。

そうは言いながら、市の財源には限りがあり、全部にまんべんなく十分な予算を配分するということはできない時代になっています。重点を置くべき施策を考えつつ、全体的な対応もしていくという難しい舵取りが必要になります。私としては、最良と思われるバランスで今年度も予算を編成しているつもりです。

この予算をもとに、地域の皆さんが元気になるような地域づくりをしていくことが、われわれ市役所の仕事だと思っています。

―新任職員の皆さんは、仕事に対してどんな抱負を持っていますか。

垣原　ぼくは、高校卒業まで倉吉で育ち、関西の大学に進学しました。関西にいる間も、ずっと倉吉に愛着を持ち続け、まちづくりに関わる仕事がしたいと思っていました。離れていたからこそ、気づいた倉吉の良さもあります。それらを生かして少子高齢化や若者の定住施策に力を注ぎたいと思っています。

石田市長　確かに、外から客観的に倉吉を見たり、外の人に倉吉を見てもらって意見を聞いたりすることは非常に大切だと思います。お互いにとって、倉吉の良さがよりクリアになり、企業や観光客の誘致にもつながると思いますから。

金光　ぼくも大学時代を高松で過ごし、倉吉には倉吉の、高松には高松のそれぞれの良さがあると感じました。まちづくりの重要な要素である「人」を育てて、倉吉の良さをさらに引き出し、笑顔あふれるまちにしたいと思っています。市民の皆さんの意見を真摯（しんし）に受け止め、積極的に取り入れるよう努めたいと思っています。

石田市長　人は望みが満たされ、自己実現ができると笑顔になります。行政も市民も笑顔になると元気なまちになります。

また、行政と住民の皆さんの間に、しっかりと信頼関係を築くことが重要です。お互いがかたくなになると、反発や認識の食い違いが生じます。

石田市長（続き）　大切なのは、私たち行政が情報公開と現場主義を徹底し、考えを押しつけるのではなく理解をしてもらいながら物事を進めていくことです。それにより、市民の皆さんの信頼を得ることができ、市役所も風通しが良くなると思います。

西村　私は、大学時代から、明倫地区の「倉吉淀屋プロジェクト」に関わってきました。当初は、地元の人からさえ「こんな町で何ができるのか」と言われましたが、淀屋をはじめ、地元の貴重な資源を生かした活動をコツコツと積み重ね、大分浸透してきたと自負しています。

　その活動の中で、行政職員の関心の薄さを残念に思うことが何度もありました。ですから私は、市民活動や地域活動にアドバイスや手助けをして、まちづくりを支援する仕事に携わりたいと思っています。

　防災安全課は、住民の皆さんと一緒に、安心安全のまちづくりを行う部署であり、責任を持ってしっかりがんばりたいと思っています。

石田市長　東日本大震災の時も、津波の防波堤といったハード面だけでなく、地域の防災意識や、人と人の助け合いというようなソフト面が非常に重要だったと聞きます。防災は、地域の資源（人）を把握し、生かした住みやすい「まちづくり」です。

　また、市民活動や地域活動に市の職員が顔を見せないという意見は、私もよく聞きます。職員は、「地域の住民」として、「市の職員」として、そして「行政組織」としてどう関わるのかを整理し、公平・公正な姿勢で活動団体にのぞむ必要があります。それでいて、「応援する」というスタンスはしっかり保つこと。職員も積極的に関わるよう、私も呼びかけをしていきたいと思っています。

西本　私は、白壁土蔵群の近くで育ちました。廃れつつあったまちが、近年、赤瓦などができて景観が整えられ、観光客も増えて活力が出てきたことをとてもうれしく感じ、自分もまちづくりのために何かしたいと思っています。

　職員になる前に、民間企業に勤めた経験があります。市役所に勤めて感じることは、以前の職場と比べてコスト意識が低いということです。まちづくりを計画し、実行するにはお金が必要です。新任職員の研修で、倉吉市の財政は厳しいと教えていただきました。コピーの裏面利用や昼休憩時の消灯、時間外勤務の削減など、少しの努力を積み重ねてコストを削減する意識を職員一人一人が

安心安全な「まちづくり」を住民の皆さんと進めたい。

西村（にしむら） 麻実（まみ） 主事
総務部防災安全課

まずはコスト意識の徹底を。小さなことからコツコツと。

西本（にしもと） 愛（あい） 主事
総務部職員課

自分のスキルを倉吉のために役立てたい。

藪内（やぶうち） 大樹（だいき） 技師
建設部下水道課

もっと持つよう、研修などで徹底できるのではないかと思っています。

石田市長　私も同感です。私は市長になる以前は、鳥取県の職員でした。県の節約・節電の意識はもっとシビアでした。市役所ももっと工夫できる余地があると思います。コスト面だけでなく、地球環境の問題としても捉える必要があります。

　そういう意見は、どんどん提案して欲しいと思います。若い職員が意見を出して刺激し合えば、市役所の空気ももっと明るくなり、活性化するでしょう。

　就任当初にあった庁風改革のワーキンググループの活動も、最近聞かなくなったのでまた復活してほしいですね。私も職員の意見をしっかり生かしていくつもりです。

藪内　私は、学生時代に土木技術を学び、民間企業に技師として就職し、姫鳥線・鳥取インターのトンネル工事などに携わりました。

　地元のために、自分の技術を生かして活躍したいと思っています。

石田市長　技師の仕事は、橋や道路など、形として残るのでうらやましいですね。その喜びを感じながら、仕事をやってください。

　また工事の際は、地域の方との協議や交渉などがあります。誠実に、誠心誠意の対応を心がけてください。

―平成24年度はどんな事業を実施する予定ですか。

石田市長　まずは冒頭お話ししたように、観光・コンベンションに力を入れます。人を呼び込むことは、行政にとって不得手な部分ですので、観光協会に民間の力を取り入れ、役割分担をしっかりして取り組んでいきたいと思っています。

　また、防災行政無線デジタル化改修事業には多額の予算を投じます。市民の皆さんの安心安全のために良いものをつくりたいと思っています。

　あと、住民自治への支援も積極的に行っていきたいと思っています。まちづくりを舞台に例えると、主役は市民の皆さんであり、行政は、いわば「縁の下の力持ち」です。どんどん現場に出て、情報提供や意見収集をして、市民の皆さんの生活や活動がよりスムーズになるよう図っていきたいと思います。

　今後も市民の皆さんが、倉吉への愛着と誇りをしっかりと実感でき、いきいきと輝く未来を見すえて生活していくことができるようなまちづくりをしていきたいと思います。